

# 家庭科におけるジェンダーフリー教育

—— 家族・家庭生活の学習を通してジェンダーフリーを目指す視点を育てる ——

田 中 京 子

## 1 はじめに

本校では、女子校という特徴を生かしたジェンダーフリー教育を実践、研究している。教員が自主的にジェンダー研究委員会を作り、次のような活動を行っている。

- ① 「特設講座・ジェンダーフリー」(選択)を通してジェンダーフリーを目指した授業を研究・実践する。
- ② 既存の教科・科目の授業においてジェンダーフリーの教材を研究・実践するとともに関連する教科・科目間でクロスカリキュラムの開発研究を行う。
- ③ 本校卒業生やその他の社会人を特別講師として招き、ジェンダーフリーの視点での講演を企画・運営する。
- ④ 女子校である本校の環境・教育が生徒に与える影響を、在校生や他校生の意識調査により研究し、授業創りに活用する。
- ⑤ 創立120周年にあたり、卒業生全員を対象としたアンケートを行い、本校の教育が果たしてきた役割を検証するとともに、今後果たすべき役割を模索する。
- ⑥ 本校が所属する大学を中心とする連携研究に参画する。

これをうけて、家庭科では、家庭一般におけるジェンダーフリー教育の実践・研究を行うとともに、ジェンダーに関する特設講座を他教科の教師と協力して開講してきた。特設講座、大学と附属学校の連携研究、大学のジェンダー公開講座への参加などを通じて、家庭科における高等学校段階でのジェンダーフリー教育のあり方を模索しつつ、昨年度家族と家庭生活の学習において取り組んだことを以下にまとめる。

## 2 生徒のジェンダー意識など

生徒は全体に目的意識が高く、男女の違いを意識することや女らしさに縛られることが少ない傾向がある。将来の職業に関しては専門職志向が高く、夫婦平等、仕事と家事・育児の両立を望み、ジェンダーフリーを目指す意識は高いと言える。

ただ、実生活の面では、日常生活の自留意識や家事参加・経験が少なく、体験に基づく足元からの問

題発見が難しい。職業生活重視の現状では、人間らしい生活という発想自体が難しいが、生活しているけれども、主体的に生活を紡いでいない感じがある。

発達段階に相応しい生活参加と経験、多くの、いろいろな立場や年齢の人々との交流が望まれる。

### 3 ジェンダーフリーを目指した家族・家庭生活の学習のこれまでの取り組み

これまで、家族と家庭生活でジェンダーを中心に取り組んだ学習活動には次のようなものがある。いずれも2年生2学期に行った。

1997年度 「サザエさん」の家族をもとに、妻の就職をめぐるロールプレイ

1998年度 同上

1999年度 ・「現代の家族」をテーマに新聞作り

- ・「新聞に見る女性・男性」各分野の紙面に登場する男女の数の違いから、性別役割分業の実態を発見する

2000年度 「家族の問題」をテーマにロールプレイ

2001年度 「職業生活」を考える（計画中）

生徒の傾向を考えて、なるべく本音でぶつかりあい、他者の発言を多く聞いて自分との違いや多様性を感じることができるようにくふうした。ロールプレイは配役があるので自分がむきだしにならない。このことが普通の討論より率直な発言を促し、本校の場合は有効である。場面設定を家族とすることで、物事の解決が個人の場合より複雑になり、理想型にはまりきらない歩み寄りや折り合いの形をとることが多く、生徒に考える機会を多く与える。家事労働や介護など家族をめぐる問題を家族員の役になりきって発言することで、ふだんはあまり見えていないジェンダーの問題が浮かび上がる。これらを通じてのジェンダー的視点の獲得が授業の大きなねらいのひとつである。

## 4 2000年度の取り組み「家族の問題をテーマにしたロールプレイ」

### A 学習の流れ

- ① 家族・家庭生活の現状を考える。

新聞をできるだけ多く読んで、家族や家庭生活の現状・問題について話し合う。

- ② 家族の問題をテーマにロールプレイを計画する。

4～5人のグループを作り、テーマと配役を決める。場面設定、おおまかな話の筋を決める。

- ③ ロールプレイの役づくりをする。テーマに関係のある記事を協力して集め、参考にして、役の立場を理解し、考えをまとめて提出する。これに教師がコメントし、さらに考えを深めさせる。

- ④ ロールプレイをする。各グループ10～15分間とし、場面設定を説明して会話を始める。会話としての展開が不適當な場合は意見発表のかたちでもよい。グループごとに発表終了後クラス全体からの質問と感想の時間を設ける。

- ⑤ 各グループのロールプレイについてのクラス全員の意見感想を集めて渡す。
- ⑥ ロールプレイ後、各自で自分の役柄についての立場や意見を文章にまとめ、クラスの文集を作る。

## B 学習をしてみよう

- ① 新聞から「家族・家庭生活」の現状をさぐる。家族や家庭生活への関心はあまり高くない。小さくまとまった核家族の、他者の入り込めない親密さを理想とする傾向は強い。また一方、発達段階的には自己の確立を目指し、家族からも距離を置きたくなる年頃でもある。

青少年の凶悪犯罪、虐待、介護保険の実情、年金制度の見通しなど、新聞にとりあげられる事件や特集には、現代の家庭の不安要素となるものが多い。家庭崩壊、学校崩壊など、今まで安定して存在したものがここにきて壊れるというイメージもある。

新聞をみていくなかで、家庭はこれまでも社会や人々の意識の変化の影響を受けて変化してきたこと、今、社会の急激な変化にともない、さまざまな問題が急に表れてきたとも言えると話し合った。これを「家庭の崩壊」と言うより、変化の段階のひとつととらえたり、社会の変化に対応した多様なあり方として認めようということになる。

- ② テーマを決める。

グループは席の近い人4～5人ずつとし、話し合ってテーマを決める。各クラス9～10のグループができる。あるクラスのテーマを次に示す。

・ロールプレイのテーマ

1. 男女の役割	スウェーデンの家族と日本の家族の生活を比較する
2. 高齢者と暮らす	別居していた祖母との同居と母親の立場
3. 父	娘3人になぜか疎まれる善良な父親
4. 孫のとりあい	1人娘と1人息子との間に生まれた孫を双方の祖父母が奪い合う
5. 引越し	地方の実家で一人暮らしとなった祖母を、仕事をやめて一家で帰郷し、介護しようとして提案する父
6. 過保護	過保護・過干渉の母子と周囲の対決
7. 家庭不和	父母の不和に悩む姉と弟
8. 同居	仕事を続けたい妻に、家事のとどこおりを理由に反対する夫の母
9. 国際結婚	日本に住む外国人妻は、自国の文化をどう子どもに伝え、他の家族と共存するか

他のクラスでは、この他にパラサイト・シングル、夫婦別姓、病院の後継ぎ問題、夫の海外赴任への家族の同行、リストラが原因での父の蒸発、母の就職、少年犯罪などがとりあげられた。

### ③ ロールプレイをする。

本来、ロールプレイは即興でおこなうものであるが、今回は他者の立場や考えを理解するためのものなので、新聞その他役作りのための資料を活用し、他の役の人ともよく話し合い、あらずじや台詞を決めてよいこととした。

ロールプレイはビデオ録画した。動きはとくに求めなかったが、声音まで変えての熟演もあった。相談の段階では、「言うことが考えられない」と言った高齢者役の人が、子に都会での同居を提案されて、

「これまで、苦勞して一人で働いて守った故郷の家と耕地を私の代で手放すなんてとてもできない。」と切々と語った。親が故郷を離れられないならば、自分が職を捨て、故郷へ帰って農業をしてもよいと言う夫に、妻は、

「子どもの教育費はどうするのか。私自身の両親の世話はだれがするのか。」

とせまった。

スエーデンの留学生が、

「妻だけが家事をするのは変だ。みんなでするのが当然。」

と言う。それを受けて日本の夫が返す言葉を失う。

働く母が帰宅して、

「私にも限界がある。夕食作りを手伝って。」

と言うと、子どもは、

「食事だけはどうしてもお母さんに作ってほしいから早く帰れるようにして。」

と譲らない。どちらかと言えば自分の立場と離れた役のほうが強く意見を主張していた。口に出すことでさらに新たな問題の発見もあった。

「私の悩みはだれにもわかってもらえない。」

と思わず発言することが、その人の立場を理解しようとしなかった自分を発見することになったと言う者もあった。思いやるという漠然としたものでなく力いっぱい正確に主張することで問題が明確になる。

自分だけの主張は通らず、うまくいかなさを実感するが、たいていのグループが全体としては問題が少し解決に向かう結末となった。

### ④ 感想をまとめる。

ロールプレイの感想は記入用紙を切り取って各グループに渡す。グループは、自分たちのロールプレイに対するクラス全員からの感想に目を通し喜ぶ。

さらに、自分の役について意見を文章にまとめる。この段階でまた、あらたな問題が発見される

場合もある。

今回は、一度書いた感想に教師がコメントを加えて返却、生徒がさらに考えてまとめた。

⑤ 文集を作る

感想を印刷して各クラス1冊にまとめ、配る。

## 5 まとめと反省

毎年、生徒集団の個性、適性を反映した新しい取り組みを工夫しているが、積み重ねがない分、荒削りの展開となってしまう。あまり細かい舵とりはせず、生徒自身の発見、体験にまかせている。授業はいつも、課題を「深く考え始めるきっかけ」をつくるだけにとどめ、「あなたはどうしますか?」としめくりたい。

今回の試みを通して、他者の立場を自分と接点がないものと見なして、

「ちがうからわからない。関係ない。」

「信じられない。」

と遠ざけず、それぞれの立場を明確にしあい、独自の調和と共存をめざして対話するなかから、生活や人生へのつきない興味と、生活をより楽しく充実したものにするヒントを得て欲しいと願う。